## C—44 和裁の能率化に関する研究—大裁女物単衣長着の縫製時間について（第２報）

名古屋女大生研 荻野千鶴子 水野久子 ○安田久仁子

目的 今日、和裁の縫製作業は能率の上から一部にミシンを用いるなどしているが、依然として手縫作業が多く、洋裁に比べ、時間的、肉体的に負担が大きく非能率的である。さらに中学校では、和裁教材の実習が姿を消し、また高校においても一部の生徒を除いては、ほとんど和裁を手がけることなしに入学してきた短大生は、未熟練者であり、和裁実習時における作業能率は必ずしも良いとはいえない。そこで和裁作業の能率を考える一端として、短大生が教材を仕上げるまでの所要時間を測定、これを分析して作業の合理化を図り、今後の和裁指導の向上に役立てたい。

方法 被験者は、授業時(イ)は本学の短大家政科１年の学生50名。実験時(ロ)は(イ)の中から２名、家政科２年の学生から４名を無作為抽出した。測定方法は、(イ)は大裁女物単衣長着を扱う和裁の授業時に各自の教材にて個々に時間計測をさせた。(ロ)は同一用布で同型同寸のものを、縫い始めから仕上りまで継続して行なわせ、これをストップウォッチ法で時間測定した。

結果 1. (イ)の縫製所要時間の平均は1112分で、最も遅い者は早い者の約２倍の時間を要している。

2. (イ)の本作業は総時間の75％で、本作業に多くの時間を費す者は、付随時間も多く要している。

3. ２枚目を、実験として連続作業で作製した場合は、総時間において42％ 本作業時間で49％の短縮がみられる。

4. (ロ)の１・２年学生の各部位所要時間は、背縫では、２年は１年の75％ 脇縫79％ 衽つけ67％であり、熟練を要すると思われる衿つけでは56％の差がみられた。